

神殿に経を読むなど、非常識のように思うだろう。

しかし、熊野では、そうは考えられていない……。

熊野では、神と仏は同一と考えられている。

熊野の神は、神と仏を超越した存在なのだ。

「うらあ！三太あ！」

急に清姫が声を上げた。

振り返ると、清姫は、竹箒を振り上げて、裸足で、村の男の子達を追いかけ回している。

どうやら、村の子ども達が、ちよつかいを出したらしい……。

バアーっと男の子達が、清姫に、枯れ葉をかけて応戦する……。

キヤアキヤアと、いつのまにか、入り乱れて鬼ごっこのようになっている……。

これでは、掃除しているのか……汚しているのかわからない。

「ひめ様あ！」

たまらず、ハツが声を荒げた。

「そんな、おイタをしていては、安珍様にお嫁にもらってもらえませんか！」

清姫が、ピタリと止まった……。

そして、恥ずかしそうに戻ってくると、また、いそいそと参道を掃き始めた。

「姫様には、これが、一番、効くんですよ。」

ハツは、意味ありげに、こちらを見て笑いかける……。

安珍は、ハトが豆鉄砲をくらったような顔をしている……。

急に思い出して笑いが漏れた。

あれは、安珍が十五の歳、最初に、師匠のお供をして、この真砂の郷にやってきた時だった。

清姫は、その時、前髪を垂らした六歳の幼い童女だった。

今、考えれば、あの時、清姫は、母親を亡くしたばかりで心が不安定になっていたのだろう……「あれは、イヤだ。」「これは違う」とぐずって泣いてばかりで、ハツを困らしていた。

安珍は、清姫の気持ちを理解していたわけではない。

ただ、ハツが困っているのを見かねて……。

「いい子にしないと、お嫁のもらい手がないぞ……。」と声をかけた。